

ふうしんぜんくしゅう・ていほん  
風信子全句集・定本

心底 (しんぞこ)  
田辺 風信子



ふうしんしぜんくしゅう

ていほん

しんてい

風信子全句集

定本

心底

田辺 風信子

目次

はじめに ————— 六

春雷（昭和五十七年）————— 九

落暉（昭和五十八年）————— 九

土堤（昭和五十九年）————— 二二

緑陰（昭和六十年）————— 二二

法師蝉（昭和六十一年）————— 四

とろろ汁（昭和六十二年）————— 五五

風のにほひ（昭和六十三年）——七

冬の雨（昭和六十四年）——八七

似我蜂（平成元年）——八八

黄月忌（平成二年）——一八

露草（平成三年）——二二六

八重桜（平成四年）——一一三

蝉時雨（平成五年）——一一三

葛の花（平成六年）——一一三

花冷（平成七年）



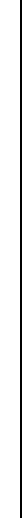
一三四

鮫鯨鍋（平成八年）



一三四

涅槃道（平成九年）



一三六

春宵（平成十年）



一三七

両子谷（平成十一年）



一三九

春燈（平成十二年）



一四〇

春の雲（平成十三年）



一四七

踏荊（平成十四年）



一四九

里の山（平成十五年）—— 一六

菜花茫茫（平成十六年）—— 一七

夜の沖（平成十七年）—— 一七六

初蝶（平成十八年）—— 一八三

豆柿（平成二十年）—— 一八五

脱藩者（平成二十一年）—— 一八六

未発の中（平成二十二年）—— 一九五

秋草（平成二十三年）—— 二二三

田辺風信子年譜—— 二二二

## はじめに

この句集は、私が昭和五十七年に俳句を始めて以来平成二十三年までの、残すべき全句集を収めています。俳句は、私の父（吉武風信子）や私から言って曾祖父に当たる鈴木花月（南画家名、豊溪）も作っておりましたが、その影響で始めたものではありません。

公務員の仕事に入って間もない自分が、いわば疎外感を拭ってくれるものを探していたとき、神の啓示のごとく、偶然に俳句に出会ったものであります。

当初の頃、いまは著名な俳人となられた中原道夫氏や能村研三氏らともお近づきになることができ、いまではそのことを大変に光栄に存じております。

中原氏らの俳句に比すれば、私の句なぞ到底比較に値するものではなく、お恥ずかしい限りでございますが、一人の生きに迷った男の吐息みたいなものだとするれば、それなりに残す価値はあるのではないかと、都合のよい解釈をしております。

みなさまには、どうか、寛容の心をもってご覧くだされば、幸甚に存じます。

平成二十三年十月二十四日 風信子識

田邊風信子全句集  
定本  
心底

春雷（昭和五十七年）

霜 深 し 用 な き さ ま に 一 輪 車  
春 雷 の 一 閃 刻 が 緊 り け り

落暉（昭和五十八年）

旅 遠 く 来 り た ん ぼ ぼ の 絮 を 吹 く  
地 下 道 を 出 で て 涼 し き 風 の 中  
終 電 車 の 尾 燈 ゆ か し め 梅 雨 の 闇  
深 呼 吸 す れ ば 青 田 の 青 が 増 す

暑さ断つがに草田男の忽と逝く  
荷車のガラガラと街炎天下  
車塵轟々夾竹桃が真つ盛り  
秋愁の束子ぼつんと竿のさき  
秋光の空地狭しと子らあそぶ  
電車待つ子に恰好の猫じゃらし  
寝ころんで原つぱたのし翳雲  
ちちろ鳴く夜や草田男句集読む

喰はれたる鈴蟲のこと子に言はず  
蟲鳴くやいまも故山を胸中に  
団栗を握る子らの瞳輝けり  
母の字におもひの意のあり文月けふ  
曼珠沙華伐れば白風かよひけり  
ふりかへる乙女子のはや冬の顔  
冬凧げり曳かれゆく船牽く船に  
藁塚やハ―モニカ吹きし頃遠し

百舌啼くや食物連鎖断ちきれず  
落暉へと一本のみち冬の都市

土堤（昭和五十九年）

八十余の落命しんと雪降り積む  
高架橋にも時刻み雪しづく  
かりそめの身と日に晒し雪達磨  
早春の一報アンドロポフが逝く  
せせらぎに心委ねて芹を摘む

踏 味 噌 や 村 い で て よ り 十 余 年  
嚙 り や 歯 を 磨 き ま た け ぶ の 吾  
け ぶ 摘 み し 僅 か な 土 筆 里 恋 し  
蕨 食 ぶ 味 噌 味 に し て 母 の 味  
森 ぶ か く 日 を 愛 で る し か 水 芭 蕉  
風 の な き 空 を あ ぶ ぐ や 鯉 幟  
も の 干 す 女 陽 の 彼 方 か ら 夏 燕  
矢 車 の 回 り 退 屈 つ の ら し む

多摩川のゆるき蛇行の果て霞む  
幹へ飛び滑りこけたり雀の子  
甥子らの泥に燥ぎし田植とぞ  
見つむれば銀河に似たり鴨足草  
晝顔にふと王城の白晝夢  
青葦の根方に晝の闇眠る  
山越えし村人いづく苔清水  
除草機を押すひたすらに単調に

魚籠下げて川いで来る夏帽子  
夏川の葦生の根より日暮れけり  
羽蟻がよろけて歩く夜の畳  
傍らに子を寝かしおき曝書かな  
ポロシヤツが竿に旗めく涼夜かな  
月草の瑠璃轟々と時が去る  
海見る男うつぶす女砂日傘  
遠をゆく日傘の女ひるの街

ロリーリゆく灼路に音を叩きつけ  
読み了へし書に日を記す夜長かな  
草むらに風立つゆふべ法師蝉  
秋風に向かふ心の纏れなく  
数珠玉の擦れあふ音をポケットに  
外したる風鈴磨く秋思かな  
子の描く砂文字消し秋の潮  
糸瓜忌の日あしの動く池の面

安寧をよそほふ村の秋桜  
光りつつ岩穿ちゆく秋の水  
こすもすの花のすれあふ無音かな  
紅葉ふる中に怨憎会苦を脱ぐ  
日のさして水底にある晩の秋  
ネクタイをきりり菊花の香りかな  
朝まだき曇天のふと冬隣  
水底の晩秋を食ふ小魚かな

ふるさとの畦縦横の遠刈田  
土剥げて自然薯の瘤頼もしき  
黙々と母小春の櫓を組む  
団欒とおもへば恋ほし冬燈  
落葉舞ふときに嵐のたつ如く  
目にみゆる風や落葉の溜まり池  
とりどりに命燃えをり山紅葉  
入つ日へ子ら駆けゆけり枇杷の花

寒菊や流しの水のちろちろと  
鈴懸の幹うすあをく冷えゆけり  
冬暁の街が俄に動きだす  
音たてて車行き交ふ時雨かな  
潮騒の聞こえて寒し暮鳥詩碑  
冬の夜海の怒濤を内に秘め  
冬すすき鈍く明して日が昇る  
ひとまはりして群に入る子鴨かな

羽ばたきて水輪の中の鴨となる  
水鳥のつひばむ水の音かすか  
霜夜の卓妻の眼鏡と蜜柑二つ  
地下酒場出でて都心の燈が寒し  
飛び来り泳ぎひそかな鴨となる  
忙しき道すがらふと年の市  
冬晴や泡も芥も水脈の中  
残り柿一つとてなし空まさを

日溜りの土堤大いなる街見ゆる  
枯草をちぎればほのと埃かな

緑陰（昭和六十年）

水澄んである川底の淑気かな  
石垣に日のさしみたり牡丹雪  
つはの葉にしばらく解けず初霰  
南天や流しの湯気は朝支度  
みるかぎり都市無限大冬に入る

雪 蟲 の 一 点 雪 に 紛 ら は ず  
日 暮 な る 景 に な り き り 浮 寝 鳥  
ス モ ツ グ の な か 暮 れ な づ む 赤 瓦  
掃 き 溜 め し 塵 な ん ぞ に も 霜 日 和  
独 楽 澄 め り 縁 に か す か に 音 た て て  
ゴ ム 長 の 敷 藁 温 し 雪 遊 び  
青 竹 の 匂 の す が し 櫛 作 る  
端 焦 げ の 火 吹 竹 に て 吹 き 起 こ す

おふくろと語らふとなく麦を踏む  
寒星の触れて木立に刺さりさう  
墓のべに落暉を放つ冬木立  
豆腐屋の笛葱畑をよぎり行く  
寝静まる街いちだんと恋の猫  
枯山にいま走りしか兔道  
日をふくみ饒舌にあり春の水  
蟹採りの子らゐらずなりぬ春の水

蝌蚪の水波紋に眠り誘はるる  
遠空に朱雲放ちし枯野かな  
春無辺物憂げな鯉の動きにも  
ゆるやかな徒歩やうやくに俺の春  
どうしてと反復する子春隣  
こごりぬし頸がほぐるる四温かな  
またしても自家撞着に日脚伸ぶ  
まんさくの花ほぐれけり都市の内

子ら来り眠るふらここ起しけり  
ふるさとの空気を吸へば風光る  
寄合のさまと見てをり福寿草  
山茱萸さく今日はけふなる日の光  
春一番物干竿を離れけり  
蝉梅や緩みかけたる空の張り  
静かさや芝縫ふ春の雨の糸  
おにぎりを食ふ子めがけて残り鴨

沈丁の花ひとつ香の一つとも  
鞆に思へば遠し故郷とは  
春寒の心の奥に日和待つ  
おもおもと雨降りやまず二月尽  
羽づくろひして遠く見る残り鴨  
冬航路燈の塊りの都市みえて  
春ふかし丘に異人の墓標群  
紫雲英田に置き忘れぬし夢一つ

道行けばいまもむかしも麦の青  
ふるさとの香のただ中の春田かな  
春めくと両子の嶺を仰ぎけり  
啓蟄のたとへば吾子の書くの字  
青天のひとかけらとも蜚蝶  
春霖の上りし街にジャズ還る  
春風の吹く街なら口笛をふく  
亀鳴くや夜道が常のサラリーマン

夜雨止んで沈丁低きより匂ふ  
薇の小さきの字は残しおく  
白木蓮や樹液は既にクロロフィル  
目刈時電車ごとりと発車して  
黄水仙いまの未来が身におもし  
いかり草一人静と売られけり  
山吹や石にやすらふいしぼとけ  
藪中にうらしま草の孤独かな

羊蹄の花ひと揺れし都電過ぐ  
多摩川に泡乱れつつ夏に入る  
蒲公英の絮飛んで過去また一つ  
糸柳そよりと風なき運河  
万緑のとほくに塵のごとく街  
身ごもりし気配の妻に立夏かな  
囀りの始まりしただ中に居る  
おもむろに浮葉押し上げ鯉の鱗

風吹いて芍薬白き渦となり  
大いなる緑陰のうち深大寺  
ひなげしの蕾の裂けて炎見ゆ  
虎耳草地球も星に違ひなく  
雨の日の殊に妖しき薔薇の紅  
凶鑑にてみしがたしかに紫蘭なり  
麦笛をふく口中の甘味なる  
緑陰にひたすら飯を食ふ子かな

緑陰を抜けて光の街に入る  
蒲田にて味噌ラーメンを食ふ薄暑  
著莪咲いて下町いまだ釣瓶井戸  
風かよふ緑陰抜けて都会人  
あぢさゐを見る首筋に雨ぼつり  
つまくれやゆふべの水に鍬洗ふ  
少女の瞳何かを探す枇杷熟れて  
雨霽れし午後の出水の匂ふかな

雨傘の図柄をまはし梅雨の女  
梅雨はいつ上んのぢあると独り言  
ひるがへる旗を越えをり夏の雲  
三伏の半月重く赤く見ゆ  
夜に啼くみんみん蝉や街に住む  
風鈴のりりりちりんと夜風かな  
遠花火闇にこぼれて闇還る  
海界へ昇るヨットの白帆見ゆ

海界を圧して立てり入道雲  
秋めくや風が足裏を吹きゐつつ  
束の間の季とはおもふ砂日傘  
みんみんの遠くきこゆる愁ひかな  
吊革にわが身を支へ夕焼あむ  
脚おもくいま帰りしに蝉時雨  
子よ遊べ思出なせよゑのこ草  
街畑にみぬる青栗長子と見る

夕焼やわれも電車に運ばれゆく  
夏座敷鞠のごとくに子の眠る  
雨足のとぎれとぎれに蟲の声  
来し方を顧みる夜の野分かな  
秋蝉を遠くに鳴かし午睡かな  
顎へる鯉に残暑の容赦なく  
うす霧らふ街の底ひへ朝日しむ  
カンナ燃え戦火を刻す俺の目に

みづひきの水に魅かれてもつれあひ  
みんなみの暮れゆく空へ秋燕  
糸瓜忌のゆふ空かへる燕かな  
地を這ふ秋の蛾ふいに飛び立ちし  
秋彼岸日々の暮しがなまなまし  
一子寝て一妻も寝て蟲盛り  
いつかしら聞かずなりぬし秋の蝉  
雨のふる刈田をあゆむ鳥かな

色づきし棗やひくき屋根の家  
木犀の香に定まりし日和かな  
地震揺れてすぐまたもとの蟲時雨  
並木吹く風の日ましに秋の音  
アパートの壁の染みより鉦叩  
萩を過ぎ萩の落花に惹かれをり  
秋日和いつも背広の重くして  
踏んづけて存在感や銀杏の実

ポケットの手を寂しめる秋思かな  
来し方のタイムカプセル椎拾ふ  
水の帯解きゆく秋の河口かな  
柿の秋軒の端まで空の青  
匂ふ数珠一つ二つと針通す  
ひとりでにまはり始めて落葉ふる  
雨霧の方武甲かと指さしぬ  
実紫霧の中よりあらはれし

秩父路やいたるところに柿熟れて  
牛小屋の匂うれしき秋の旅  
堆き落葉のうへに晝餉かな  
残照のしばし梢の紅葉かな  
空暗くなりゆく午後の花八手  
逆立てし尾は菱喰の何いさる  
試歩の女山茶花の角曲りゆく  
チヤルメラの音遠くゆく炬燵かな

雨ごとに冬の木立を粧へり  
アロエ咲く岬の径のゆふべかな  
返り咲く姫踊子や石廊崎  
冬靄や煙突とほくけむりふく  
冬麗の村に小さき母校かな  
押花の染みある日記果てにけり  
単身の勤めも慣れて根深汁  
一枚の半ば日当たる冬田かな

静かなる佳き町にして冬菜畑  
冬麗といふ畦道のうら寂し  
ひだまりへおのづから入る歩みかな  
熱爛にして悲しみの澱も飲む  
ひとところ猫の道開け障子貼る  
ふゆやすみ百葉箱が日をあつめ

法師蝉（昭和六十一年）

大海鼠水吐き出して捌かれぬ

爪先から胸の心まで寒に入る  
議事堂の天辺さむき日暮かな  
坐禅して祈れば寒夜女兒生まる  
冬川を斜めななめの渡し舟  
なじみたる柴又の土堤冬ぬくし  
玄翁の岩叩く瀬の春近し  
待春の心ふくらみゆく心  
連風の昇りて天地おもふまま

歴史とは皿に載りたる桜餅  
瓶にさし蠟梅いよよ造花めく  
いてふの芽内なるものの切々と  
百姓の血の疼くかな春立ちて  
夕月の下弦するどく冴えかへる  
回廊の一角きしむ余寒かな  
寒鴉ビルの日当る高さ飛ぶ  
聖路加の塔の明るむ雨水かな

春あらし櫛の大樹を唸らせて  
沈丁の十日もすれば匂ふべし  
早春の豆腐に暗き桶の底  
掬ひたる豆腐に春の雫かな  
ウインドに毛皮の具合みてゆく娘  
羽化しゆく遠つ国のあり二月尽  
春昼のめくるともなき図鑑かな  
春愁やコップに残す水六分

啓蟄や畢竟はみな生かされて  
春めくや木々だにいこふ有様に  
沈丁の雨にしみ入りつつ匂ふ  
春霖の包む疎林の底にをり  
なつかしき勾配の道陽炎へる  
欲ふかき俺を憐れめやお中日  
大雪が雪の果とはなりにけり  
羊蹄の酸きことを子に教へけり

花種を蒔くや少しは子に任せ  
花屑といふ過ぎてゆく刻を踏む  
目借時仕事言葉のふと可笑し  
爪をきりゐて時鳥鳴き始む  
つばくろの一羽に大き青き空  
春雨に水輪息づきにはたづみ  
夢といふ求めゆくものあやめ咲く  
こでまりの花群ごとの時空かな

なめくぢり解けて日暮となりにけり  
寝返をうつ子となりぬ瓜の花  
夏山の向うより雲湧き出づる  
葉桜や道はゆつくり歩むべし  
由布岳の新緑に向け子をかかく  
葉桜となり重力のひしひしと  
夏山に向き吹っ切れぬことを秘む  
ふりそそぐ日差の中に豌豆摘む

入梅の朝やすらけしバスを待つ  
枯れ放題伸び放題に露畑  
表情のゆたかなる子よ半夏雨  
子子の水は一気に零しけり  
蟻の列いまはわが家を遠巻きに  
蝉を待つ幼心を捨てきれず  
もがきても水輪の中のあめんぼう  
牛蛙ぶおんぶおんと梅雨を恋ふ

いじめなぞ恥知らずめが今日も梅雨  
子燕の餌を欲る口の闇深し  
子燕の一口あけみな開くる  
桃食ふや童話に疎き日々にして  
雨ふるや落の葉蔭に山頭火  
故里に燃えてカンナの赤ばかり  
比売語曾の社しづけく灼島土  
吊鐘草夜の冷のこる岩の陰

頂の 見えて 遠のく 登山かな  
売れ残りたる 灯籠の まはること  
石蔭に 窺ふ 蜥蜴の 尻尾かな  
野にとほきなりは ひ久し 鳳仙花  
黄昏は 向日葵の 茎あまた 見ゆ  
一と ころ 雷雲の 鋭き 襞を見つ  
蟲啼いて 寂しさが 身につき 始む  
鉦叩も っとも とほき音として

無果花や父は寡黙にあらざりき  
梨拾ふこと打算せる野分まへ  
缶蹴の鬼の目を引き赤蜻蛉  
蟲啼いていよいよ山居のごとく住む  
秋光のどこからとなき風の中  
速まればすぐ鳴きすぼみ法師蝉  
蟋蟀の近きが啼いて闇縮む  
一湾に尾根滑り込む夕焼かな

季ゆくをつくづく惜しと法師蝉  
子が犬を犬が子を追ふ刈田かな  
朱のなか鯉跳ね上がる入日かな  
葛咲いて川に遠のく思ひかな  
曼珠沙華踏みしだく子の幼顔  
寝転べば嬰の世界あり法師蝉  
縁がはに何見る父や草雲雀  
蟲しげくなり物の音しづまりぬ

髪をよく梳る娘に秋うるはし  
夢ばかり大き三十路か獺祭忌  
百の蟲百種の闇を紡ぎをり  
雷雲の襞よ地球も天体か  
土の香の持論さておきとろる飯  
草むらの露けさといふ旅心  
生きてこそ物も食へるぞ秋の夜  
柿熟れて納屋に息づく風情みゆ

秋たけて町が無口になりけり  
うるこぐも暮れゆく街がドラマめく  
四五日の雨粧へる山となり  
どぶ川の音さへ淨し冬に入る  
色彩の奥何かある冬紅葉  
日の当たる菊の大輪身を正す  
実紫三十路の兄の山暮し  
どぶ川の水すれすれの熟柿かな

母恋し旅の山路の藪柑子  
冬川の清さ寂滅為樂とも  
冬海の凧げる底ひに死はあらん  
過ぎし日を偲ぶ甘さのけんぽ梨  
息吸へば肺の中まで凍てりけり  
冬の落萎むほど寄り添ひにけり  
浮寝鳥なにか愁へる嘴のさき  
鳩浮かびしばし入日へ泳ぎけり

暖冬の狂つちまつたる現つかも  
餅搗のかつては三十白なりき  
ふるさととの八畳座敷餅筵

とろろ汁（昭和六十二年）

陸凍てて昇らんとする日を留む  
冬暁や硝子細工の空缺けて  
白鳥の歩む滑稽を哀しみぬ  
枯木立一本一本並びけり

濃紺の海に爪たて北吹けり  
待春の虚を突き崩す汽笛かな  
白鳥の離るるもあり一羽来る  
とまとをば寒夜に食らひ寂しめる  
冬ざれが孤立系にて白くなる  
里の春貧乏神は去りたまへ  
街裏の堤にあそぶ春の潮  
気負なき芽吹も神の木と讃ふ

学童は駆けてゆくもの犬ふぐり  
朝曇りたる白木蓮の世界かな  
ただの空地が踊子草の舞台とは  
落味噌や来し方はみな酔中に  
真上より子の丸き顔蝌蚪の水  
蝌蚪の群なかへ中へと鬨ぎあひ  
春燈を映して都市の川である  
犬ふぐりただの空地を飾りけり

春の雪破れかぶれの如く降る  
錆びつきし扉ひとつつや母子草  
表紙より仁王が睨む春炬燵  
蛙子のひとかたまりを一つ出づ  
地を這ひ鴨ら発つ日の間近らし  
野の石も佛に変へて涅槃西風  
混淆の寺の鳥居のつばくらめ  
野佛に慶州の春の思はるる

蜷のぼる石にとるとる青みどろ  
白木蓮のかくいさぎよき落花とは  
砂浜に果てたる春の潮の痕  
水底に揺るるもあはれ蜷の道  
ぬるま湯の顎が上の花冷よ  
春落の金平すこし夕餉樂し  
蟹逃げて砂をよそほふ磯長閑  
夕桜まはりの闇を濃縮す

梟の玩具逆さま目借時  
燈に浮かぶ花のぼつたり重みあり  
嶺にはや桜模様の見あたらず  
わが膝を子に任せおく目借時  
田蛙や見ずなりたるに火振漁  
麦笛吹く時に少しく逆らつて  
瀬干人魚の世界を見すかせり  
マンネリといふといへども通し鴨

蟲の夕日を廻る単調に  
ふるさとの道やはらかし蛇苺  
投げ苗を泥に滑らしつつ取りぬ  
万緑をはづれし火の見櫓かな  
鞠脱いで野を旅するか額の花  
日輪に触れんと葵咲き上る  
子の大き瞳きらりと蟻潰す  
地軸にも傾きのあり鴨足草

行間の寂しさのごと額の花  
窺ひつつ出て滑りゆく大蚯蚓  
ぼうふりや水の中なる寂世界  
雷鳴の遠さかりゆく蚊帳の中  
空梅雨の一句何かがもの足らず  
子ら睦む鋤形蟲に喧嘩させ  
傾きて曲りゆく路霧ふかし  
幼子の欲育まる半夏生

蟻 潰 す 子 の 残 酷 を 諾 ひ つ  
風 鈴 の か る き 音 色 に 過 去 ほ ぐ れ  
扉 を 開 け て 炎 暑 の 中 へ 踏 み い づ る  
も じ ず り の 巻 け ど と ど か ぬ 空 の 青  
ふ る さ と に 空 還 る 日 の 百 日 紅  
思 ひ 出 の 糸 つ な が ら ぬ 蝉 時 雨  
ひ ぐ ら し や 未 だ 切 字 の 定 ま ら ず  
秋 の 風 吹 き 起 こ し た る 捨 び い 玉

鯨釣の口癖にして「いい形」  
茅蝸の施身聞偈のひびきかな  
秋立つや脚裏に策を練る海星  
河口見るために来りて鯨釣す  
子供らに囲まれて栗剥いてをり  
鮮しきものの娘の頬と膳の鯨  
鬼灯へ両手差し出す蒙古斑  
膝に置く両手が淋し鰯雲

燃え盛るカンナをもはや制し得ず  
鉦叩夢のキーもう出来たかや  
弓なりに日差を押し野分ふく  
風と子を遠く遊ばす花野かな  
指を引く幼のちから吾亦紅  
団栗を大事にをさめぬし財布  
人はなぜ争ふのかや鉦叩  
山の土すこし播り込みとろろ汁

山芋の蔓の逃げ込む木の根っこ  
地上界知り山芋の即搦らる  
山芋の穴の深さの誇らしく  
けふ越えし雑野をおもふとろろ汁  
人生の意味とし啜るとろろ汁  
わが家を自然薯庵といはば言へ  
とろろ汁俳談義なんぞ後回し  
幾人か逝き稲架の立つ頃なりし

ナイフごと梨屋に梨を勧めらる  
冬めくや子の数へ癖はたとやみ  
娘の鼻に指触れてみる布団の中  
流れゆく影追ふ影も小春かな  
ネグリニよときに想へや紅葉寺  
山茶花のさらりと解け散りにけり  
凧のはたとしづまる虹のまへ  
冬の虹向ひて行くに退くばかり

幸  
せ  
が  
欲  
し  
い  
と  
冬  
の  
虹  
讚  
ふ  
  
美  
し  
と  
い  
ふ  
ま  
に  
冬  
の  
虹  
消  
え  
し  
  
青  
天  
を  
一  
と  
仰  
ぎ  
し  
て  
鳩  
潜  
る  
  
き  
こ  
き  
こ  
と  
触  
れ  
ば  
音  
す  
炭  
俵  
  
真  
向  
ひ  
の  
視  
線  
は  
避  
け  
て  
暖  
房  
車  
  
飴  
を  
欲  
る  
幼  
子  
の  
意  
地  
著  
膨  
れ  
て  
  
海  
苔  
ひ  
び  
の  
群  
立  
さ  
び  
し  
冬  
の  
月  
  
日  
の  
暮  
れ  
し  
坂  
歳  
晩  
の  
氣  
の  
満  
つ  
る

飯店の裏路にしむ師走かな  
子と遊ぶとき極月のちとゆるむ  
大声で祖母と語らふ日向ぼこ  
生れ来し前の闇より虎落笛  
子の寝言短くやみし虎落笛  
ほうほうとなれも泣くかや虎落笛  
海苔粘に燃殻落とし冬夕焼  
寒柝のときに父子の会話かな

夜 番 の 子 調 子 に 乗 り て 歌 う た ふ  
ふ と 亀 の 泳 ぎ と な り て 鳩 消 え し  
幸 せ と 素 直 に い へ ず 去 年 今 年

風のにほひ（昭和六十三年）

人 日 の 止 り さ う な る 掛 時 計  
凍 て つ き し 音 引 き ず つ て 終 電 車  
よ く 見 れ ば 海 山 の あ る 布 団 か な  
少 し く は 麦 踏 も し て 近 道 す

闇のまた向うの闇も恋の猫  
雪女窓を窺ふ夜風かも  
春寒の背筋のあたりのぼるかな  
迷ひ出し春一番となりにけり  
逆らへる泥に爪たて田芹つむ  
消えかけて先へ伸ばんと畦火かな  
黄梅をもぎて俺にも意地のあり  
頑なな素性は母系春の風邪

鳥雲に半島といひ山深し  
黄塵に左舷ゆつくり傾けり  
姿見の春待顔のこちら向く  
ふらここが新顔一つ加へけり  
読み了へし恵海旅行記雨水けふ  
子の寝ねし後の屋根へと春の雨  
盆梅を包む宇宙が暮れぬたり  
連翹のとんとん拍子おそれをり

方言の少し昂ぶる遍路鈴  
字にいふ塩田の池水草生ふ  
干竿がはるいちばんを一笑す  
春の蠅とめ乳牛の目のうつろ  
春風と越ゆる萑菑の木峠かな  
文珠仙寺と俺と囀りのただ中に  
青春のためらひに似て牡丹の芽  
かへるごの屯たむろでひしめける

さわらびの未だ八分の眠りかな  
脊椎の芯ずれてをり菜種梅雨  
船遠くかさなり離る花蘇枋  
咲きそめし辛夷は騒ぎゐるかたち  
紫雲英田に幼をはなち雲仰ぐ  
おぼる夜や未来は多元方程式  
花冷や宇宙の果ての現身に  
帰りしな少し欲張る浅蜷掘

練馬ナンバーの車停めあり蕨山  
藤咲くや峠を越せば両子谷  
山藤の咲けり無窮の川の音  
古墓に畏怖なほもありしやがの花  
あはあはと光たたふるえびねかな  
ルームミラー緑さす野が流れけり  
子燕を案じぬし父病みにけり  
語尾長の少女らがゆく余花の下

病む父の泪よとほき穂麦畑  
宿酔の顔のほてりに雲雀鳴く  
溝浚へ命を得たる水走る  
なつかしき母子となりて露をつむ  
母小さし露摘みやると雨の中  
子に肩を叩かせぬたり時鳥  
廃されて久しき母校草青む  
青蛙さとりがほにて背伸せり

悠久の波をかなしみ夜光蟲  
子の尻のゆたかなりしよ天瓜粉  
浜痩せて晝顔がまた後退す  
樋水の垂れしくぼみの松落葉  
ふるさとの道やはらかし蛇莓  
べらあはれ原色まざと日に晒し  
燈の下に金魚日中のごと泳ぐ  
みどり夜の籠を出さうにぬひぐるみ

夏長けてゆくペチユニアの花帽子  
ためらひを何時や知る君の白き笄  
美しき死を待つ汝か夜の金魚  
早苗響や媪の笑みのくしゃくしゃに  
白南風にアジアの子らの声ぞする  
岩礁のしだいにあらは海薄暑  
夏の波颯とくづほる孤独感  
のがれえぬ身につきし殻半夏生

三伏の金魚ひらりと身をこなし  
はすの葉に蓮の葉かさなりて暑し  
麦藁に消えのこる風のにほひかな  
思案顔せる青蛙笹の葉に  
浸す掌にもりあがりもりあがり清水  
清水滾々ながれにゆだねながれけり  
どう見ても時計のごとし時計草  
時告ぐるともおもはれず時計草

齒車は何の仕掛けぞ時計草  
夕立に濡れて歩むも故郷よし  
海に向く窓あけはなち夏館  
いくたびも練るスケジュール戻り梅雨  
炎帝に尻叩かれて海山へ  
晩涼やいつもの笛で列車発つ  
忙しき母には無駄さ道をしへ  
飲み干して皆吐息つく生ビール

自省とふ一語のおもさ戻り梅雨  
燈ゆ垂れし紐弄ぶ晩夏かな  
寂しきは螢袋にしまひけり  
堂々巡りして褻衣なり秋の風  
蛸壺に風生ぬるく吹く夜かな  
砂日傘立て小さなる基地もよし  
日盛の渚すなほな吾がゐる  
爪さきが渚へさそふ日の盛り

入道雲なれも幼子抱へゐて  
ぼうぶらで客の目をひく八百屋かな  
ずゐき食ふ性懲りもなく田舎人  
蟲啼くや傷は自ら嘗むるべし  
天の川日記にしるす恨み言  
蟲の音にたぎつ瀬のど瀬間のなか  
粘つこく降る秋雨の日なりけり  
日輪の落し子のごとつくつくし

柿の秋農ほるぶ日遠からなくに  
彼岸花のみにまつはる湿りとも  
子供らに薙ぎ払はれて曼珠沙華  
舗装路に入り怯みつつ穴まどひ  
暮ふかき水底がみゆ鱒子釣  
自然薯を掘ればさながら走馬灯  
渦まける思考の中へ蟋蟀鳴く  
稲架といふ山里に籬はむるもの

弁当は木に吊しおきじねご掘る  
土匂ふ穴のぞきこみじねご掘る  
役人の顔なんぞ捨て自然薯掘  
海猫の忽ち群るる冬隣  
稲架立つやものの果たての整然と  
吾亦紅一つむしりて旅心  
主役ほぼ掌中に村の稲架襖  
冬海に得し濃紺の海星かな

縁側の日向うつろひ祖母移る  
しみじみと佛の村の刈田かな  
整然と刈田のつづく落暉かな  
日と影と負ふ藁塚のぼつねんと  
畦道をふと歩みたき小春かな  
冬麗の反照に浮く漁り舟  
夕時雨子の悪さ知りほつとせり  
櫛紅葉もつとも村の美しき

山芋を搗る過去の音今の音  
とろろ汁よかりし年と語りつつ  
じねご掘る穴より昔の風の音  
風邪癒えず時とどこほる床に臥す  
大方の野の枯れわたる日和かな  
冬暁をもつとも浴びて工場群  
寒夕焼山一枚の影のうへ  
東京の紅ここにあり青木の実

皇の苑の冬麗いたましや  
冬凧げる海ながれ藻のたゆたへる  
行年や人また来りまた去りて  
子の寝ぬること忽ちに夜半の冬  
灰皿に火を消しをるに虎杖笛  
朝日てる干潟したしき師走かな  
深闇がかすかに震ひ去年今年

冬の雨（昭和六十四年）

日脚のびたる掌のうらおもて  
遠くより冬日をあみて友来る  
輪郭の一角くづれふゆの雲  
冬の雨しづかに昭和流れけり

似我蜂（平成元年）

冬眠の熊のごとくに一日過ぐ  
涸川にしづもる魚のありにけり  
冬暁に小さき命として向かふ

冬 暁 や 厨 に う ご く 妻 の 音  
着 膨 れ に 祖 母 平 成 も 包 み こ み  
庭 木 々 に こ ぼ る る ほ ど に 寒 雀  
暗 雲 に の ぞ く ゆ ふ ぞ ら 日 脚 伸 ぶ  
暖 冬 の 揺 り か へ し か な 寒 波 け ふ  
宿 醉 の 羞 か ぎ り な し 牡 丹 雪  
を さ な ご の 多 弁 が 主 役 鬼 や ら ひ  
両 子 路 や 先 づ 菜 の 花 に 迎 へ ら れ

沈丁の香ほど隣と往き来なく  
ゆふぐれの空気よどみし雨水かな  
半島の奥山ひくく黄砂降る  
風のなき日に白木蓮のひらき初む  
木瓜ひらき農家に若き人を見ず  
啓蟄のためらひいまだ土の中  
雪柳大いに流れゐる日中  
春宵のとまり木にふとわが三十路

白木蓮のくづほれてより風もなし  
ゆくりなくほうろほきよとはつねかな  
両子寺へ曲る山道梨の花  
蓮翹の道つづくまで続くらし  
字図にはなき道あゆむ堇花  
春風の抜けゆく鬼の背割岩  
子の吹きし石罅玉わが鼻に割る  
蛇口より水ほとばしる四月かな

迫りくる樟の若葉をただ仰ぐ  
一八や寂しみ癖はふるき癖  
しほさゐやひなげしは日に首を垂れ  
単簡の形はいまもチューリップ  
春霖のさむくけぶれる杉生かな  
げんげ田の燃えしづまりし寂しさよ  
山吹や石にまぎれていしぼとけ  
泊船のごとくに夕餉花づかれ

芥子坊主おのが行方にまどひをり  
草笛のはるけき旅の音色かな  
麦刈に加はりたくて佇めり  
蝦蛄を剥きつつ陰口も少しいふ  
ぼてぼてと音たてて鯖釣れにけり  
雨ふるや麦藁籠を編むとなく  
麵つゆに黄身まざりたる立夏かな  
五月雨や夜更の頸がこつと鳴り

モノク口となりゆく時を悼む春  
桐の花無何有の夢いまもなほ  
桐咲くや空茜してなほ暮れず  
夏風邪を家宝のごとく保ちをり  
ふるさとの闇はや螢の匂もつ  
浦島草なにを釣らんと糸垂らす  
夏めいてきらきら光る街歩く  
竹籠にからぶ飛魚海向いて

傷心の日々もありたり蛙鳴く  
夏畑や風に堆肥の臭ひくる  
この日ごろ白髪めにつく夏鏡  
愚かなるわれに似る夏蕨摘む  
政変の報なまぐさき入梅かな  
入梅して腐敗のすでに蔓延す  
治安といふ狂気六月の星期天  
われを見る瞳の美しや田搔牛

道をしへ浄土へ吾もつれゆけよ  
夏蝶の光となりて飛びゆけり  
越えたしと思ふ遠さに梅雨の尾根  
梅雨の雨筈を漏るるがごとく降る  
日のさしてあぢさゐの白あをみけり  
あてどなき旅思ふ眼に額の花  
空梅雨の帳尻のあめ恐れをり  
船蟲のときに戦車のごと動く

旅人のごとき寄居蟲を拾ひ上ぐ  
海牛の鉤外しやる薄暑かな  
三軸を自在に海へつばくらめ  
桔梗の日当る方へかたぶける  
ゆきのした世事に埋没するなかれ  
窓そとは梅雨傘さして歩みたし  
あめんぼと水と暮れゆく山湖かな  
子の欲はふくらむばかり氷菓子

梅雨明に幼児言葉の一つ減る  
向日葵と一緒に立つて海見をり  
目のまへに津波のごとく青嶺かな  
日覆の奥に駄菓子を売る店か  
幼子にまたも見つかり天道蟲  
きしり鳴く声闇にゐる天牛  
炎天を力なき俺となりて歩む  
疲れ身に冷素麵を啜りこむ

人 群 が 枢 押 し 出 す 蝉 し ぐ れ  
葬 了 へ 人 か へ り ゆ く 蝉 し ぐ れ  
団 地 よ り 声 沸 き 上 が る 花 火 か な  
同 じ 闇 み つ つ 待 ち を り 花 火 空  
迫 り つ つ 淡 く な り つ つ 花 火 消 ゆ  
暮 れ て な ほ め ら め ら と 鳴 く 油 蝉  
立 秋 の ず れ た る 眼 鏡 か け な ほ す  
半 ズ ボ ン 脚 に を さ な ご か ら ま せ て

ふく風に蟲啼きいづる出船かな  
秋なぎさ木片むなしく寄せかへし  
高波を棒で叩く子野分あと  
自我蜂もなりはひか巢に出で入りて  
法師蝉ひごとにかすか季がゆく  
哀歡に遠のく三十路曼珠沙華  
愚鈍とも倅せかとも秋団扇  
潮ひきて干涸ぶ港カンナ燃ゆ

そぞろ来て時を消しゐる根釣かな  
秋雨や遅出の蝉にいとまなし  
ちらほらと藪蘭の咲く野の秋意  
白露かなみな収束のけはひにて  
をさなごの瞳が籠のそと秋の蝶  
東京へ飛行機が発ついわし雲  
血より濃く曇華咲けり隔離棟  
夜更けてネオンが淋し天の川

うまおひや灰皿に火をねぢり消す  
喪服著し妻別の顔あきざくら  
朝寒のよそひし飯が匂ひたつ  
こすもすを真正面にて嗅いでみる  
曇より日のもれてをり秋桜  
潮ひきし河口あらはに秋暑し  
山ぎはに日の赤あかと稲稔る  
生きてゐる形に置かれ百舌の贅

酒場にてむなしく力む俺の秋  
ひもすがら畳にごろ寝そぞろ寒  
梨食へばこの幼子にして静か  
天高し山ふところ<sup>に</sup>泪ぐむ  
由布岳の裾に音なく秋の水  
すすき原風道生まれゐる音ぞ  
わが魂もいつか通らん花野かも  
粧ひてほのかに紅や由布が原

山裾に草紅葉せる小沼かな  
音ひくくすすきの原を風渡る  
刈田道まつすぐ川原へと歩む  
交みたる蜻蛉ふれゆく沼澄みて  
柿熟れて村の木小屋の開けつ放し  
夕暮はわだつみ恋ほし石路の花  
豊作といふも寥々遠刈田  
冬の雲海から山へ暮れんとす

家の燈が刈田の向う一つ点く  
一年は空白に似て冬なぎさ  
蓑のごと藁塚置かれ人のゐず  
冬鳥のばら撒かれたる河洲かな  
庭なかに鳳仙花の子返り咲く  
由布岳の根つこの沼も眠りけり  
歳々はくりかへしかな石路の花  
日向ぼこ港の見ゆる位置占めて

冬ざれてみな洗礼を終へしもの  
虎杖笛とくに研ぎすまされて泣く  
棕櫚のまの海たひらかに冬日いづ  
人知れず咲ける八手や人恋ほし  
丹念に仕分けてボーナスの末路  
破蓮のとりぞかれし平なる  
冬暁の朱はけぢめなき海と空  
づけづけとも言ふ勢子を恐れけり

風の中這ひつくばつて自然薯掘る  
日溜りとなりし裏庭にて遊ぶ  
対岸の家は裏がは冬日和  
指さきは蜜柑剥き革命を讃ふ  
柔らかき面差の君逝けり冬  
現し世に凍てつつ君の死を悼む  
懐手もうすぐ薯の焼くるはず  
セーター着て少女は恋を知りぬべし

マスクして校門くぐる余裕あり  
たばこの煙去年より今年へと流る  
二時間を余す元年惜しみをり

黄月忌（平成二年）

一束となり異次元へ去年今年  
著膨れの祖母に明治の匂ひけり  
雪の積むあしたやかくも音のなし  
寒の雨けぶらふ海の沖が見ゆ

青じろき光をこめし氷柱かな  
春立つや積木の城を子の誇る  
十年を迎へしわが家鬼やらひ  
浅春やゆふぞらは朱の沈殿し  
早春はダークグリーンの雨が降る  
二ン月や先ふくらみにひかる街  
葛藤のなきごとく街春の霧  
音のなく霾るあしたパン焼きをり

黄塵や支那海とほく激ちぬむ  
音ひくく雨ふる今宵春めきぬ  
ゆふ渚の灰色よどみゆく雨水  
畦焼の火にまねかるごとく佇つ  
防風を食みつつ話俗を出でず  
菜の花をみぎにひだりに國東路  
春雨や人為の土地は赤あらは  
沈丁や縮みつつガレージ開く

春宵のしんしんと耳鳴りやまず  
借景のはずが菜の花づくしかな  
やうやくに摘みずぶぬれの春子なり  
春子摘みつつ山に和す兄の背な  
遠く来し友を眩しみ春子焼く  
物芽吹くけふ友ひとり土に帰す  
ふるさとは春山男ぼつり逝く  
かたくなな露の臺から摘みにけり

幸はたわいなきもの土筆摘む  
鹿尾菜干しひつそり閑と渚村  
海苔日和にて一村の誰もゐず  
春晝や堂にもたれて焼ぼとけ  
山門を出できて花菜風のなか  
くにさきの春無辺かな焼ぼとけ  
禅寺へゆく道すがら犬ふぐり  
誰もゐぬらし禅寺も目借時

子に巢くふわが罪に吹け涅槃西風  
沙羅双樹いのる形に芽吹きをり  
白魚の喉もとすぎしいのちかな  
春愁の心さまさま電車ゆく  
わが生れし川辺の春や杉二本  
いとけなき両手に春の泥をつけ  
方便を知る者どうし花見酒  
石楠花や村には村の時間あり

幼子のいよいよ丸く紫雲英つむ  
春宵の音切り替はる冷蔵庫  
付出に花菜漬とはいざ飲まん  
仕事場を夜更に出づる穀雨かな  
こしのなく喉を落ちたり螢烏賊  
小走りに来るかと思れば仔猫かな  
春風邪の子の吐瀉にしてミルクの香  
耕牛のいまでも海を恋ほしむと

囀りやとんとんと子が階下り来  
春深し一人来一人去るベンチ  
赤きビーズを庭に埋むる子春の風  
春愁のシヤム猫が欲しなど思ふ  
春光に影曳いて子の帰り来る  
田平子の咲き旅心抑へがたし  
新樹まだ音なく立てり日の中に  
新緑に呼吸のできるかたじけな

篠の子を掘る山の香にいだかれて  
羊蹄は摘まず狭庭に咲かせおく  
卯の花や生意気すこし子の育つ  
きらめける外より夏の匂かな  
雨晴れて風通ふ部屋夏きざす  
惜春のわが眼のいつも遠く見る  
卯の花腐し妻いでたちの香をまとひ  
夜の緑舌にて魚の骨選りつつ

まむし草花にも業のありぬべし  
日雷まどぎは族の振りかへる  
はらわたの中の卵の花腐しかな  
寢床にて一匹の蚊を潰しけり  
夏の風ゆふべの街がにほひけり  
とどこほる海霧の奥処に溶鉞炉  
草苺かつては山を越えし道  
逡巡のまなこが清し田搔牛

をさなごに指図癖あり走梅雨  
揚げられてなほ威張りをる虎魚なり  
あかつきは遠くの音す慈悲心鳥  
墨の香のかすかにすなり朝螢  
掌に晝の螢の冷やかかさ  
不惑なる兄も駆け出し螢狩  
初夏の貞操ゆらし乾燥花  
尺取のなほも探れる虚空かな

蒼海に水母の委ねたるかたち  
その味も片仮名のやうパセリ食む  
ともあれと晒鯨をもとめけり  
三伏の一步の重き坂をゆく  
夏負の切つて捨てたきふくらはぎ  
約まりはエゴイズムなり氷菓解く  
一揺れの地震のつづきの熱帯夜  
八月の樟の影濃し黄月忌

去年めでし蟲の子ならん鉦叩  
藤壺が月の貌してゐる秋思  
百円玉でジューズがぼとり街残暑  
ただざまに残暑突き抜けゆく電車  
大ホールゆゑ蠅螂も飛ばんとす  
秋郊や心にもある捨てどころ  
いわし雲空地にころがつて土管  
折紙に二艘舟など折る秋夜

始めしがもう草臥れし根釣かな  
燻れるもの中東に蟲すだく  
故里に遠きこころの九月かな  
消極の蝕む秋の電車かな  
勤休んで九月の晝の街しづか  
ままかりや酒店泡盛いまはなく  
暁の屋根に影頭つ白露かな  
わが耳にいつか棲みつき鉦叩

いにしへの彩さながらに曼珠沙華  
爺ちやんの墓まで歩こ曼珠沙華  
埋火のごとくに暮れて曼珠沙華  
晩熟をわしと待たうやかからす瓜  
里帰りしてまづ掬ふ秋の水  
爺ちやんの墓のべに亦柚子実る  
弾きあふ磁石のごとく冬二木  
溝蕎麦の咲きははそはの母恋し

秋水の反すひかりに道祖神  
採り来りまだ土まみれ初滑子  
わが子らの自慢一籠の初滑子  
ひつぢ田といふも生の犇ける  
照りかへす地蔵のあぎと水澄めり  
どぶろくも相伴となり山の寺  
安請合して山案内くさじらみ  
ましら茸置かれて無人販売所

享保の秋気たたへて星宿図  
セーターの首にあふれてゐる若さ  
冬服に戯れごころ抑へらる  
冬の蛾の落葉とふりぬ土のうへ  
綿蟲にゆふぐれ時を教へらる  
冬の蛾の陽にとほくとほく低く飛ぶ  
冬暁の臨海工場群青し  
数へ日も七時十分家を出づ

平凡な父親のわれレノンの忌  
ボーナスを渡し一部を貰ひけり  
焼け焦げしカプセルがいま凍土帯  
歳晩や予算交渉譲られず  
鴨の陣なげたる餌に乱れけり  
冬木影うつろふ左千夫文学碑  
葱あをし堤内の畑ひろびろと  
歳晩やいまだ破れぬ殻を持ち

しんしんと闇の音かも雪催  
一年の疲のなかや年暮れて  
風邪の床とりとめのなき夢から醒む

露草（平成三年）

風邪癒えし喉を寒九の水落つる  
中東に百万兵士寒九の日  
日溜りとともに移ろふ縁の祖母  
茶の花や畑にはもう跳ばぬ俺

寒 昂 わが家の燈の近くなり  
冬 苺 三十路の端に俺も立つ  
暖 房 電車間なる海が窓いつぱい  
春 風 邪のこれほどの鼻水はどこから  
土 筆 まだ無い道そぞろ歩く  
日 脚 伸ぶだらんと停る寝台車  
赤 潮 のギムノデイニウム云々と  
望 潮 なに振りかざすその鰐

春愁や若年サラリーマンの中  
磯巾着残潮の中とは知らず  
ゆうらりと磯巾着が時まとふ  
幼には大きく見えん蜷ひろふ  
あいなめを釣る岩礁の南側  
ひたすらに針操りて蜷を食ふ  
蜷食ひし口中潮の息吹満つ  
斑雪道きてベゴニアの室の中

路味噌や安らかなるに喉ぼとけ  
花馬酔木千人塚の晝ひそと  
玄海の響みと俺と春日中  
春晝の小川にそつと足浸す  
中腰のままにうごきて蕨摘む  
筍掘る曾祖母の墓のうへの山  
勤繁忙目借時などありもせで  
縄張りに我家を入れて青葉木菟

山頂のそれも岩の上若葉寒  
若葉冷せり割箸のぱりとわれ  
囀りに晒して冷えし弁当食ふ  
滝垢離の行者の祈り苗代寒  
秋立ちて悲しき心還りけり  
ふくらはぎまで浸しけり秋の川  
魂送りせし現身の寂しさや  
秋光の本草は影を深うせり

蟲鳴くや時おもむろに着実に  
露草のいづこにも俺の生れし村  
裸木にもはや讓歩の意のあらず  
にこやかにまた著膨の祖母となり  
地に群れて何たのしきや冬雀  
山芋掘る土にひたすら祈ること

八重桜（平成四年）

目をつむりたれば春晝の音の中

花冷をまとひ来てこの止り木に  
八重桜おもおもと街沈黙す  
新入生カバンが歩きをる如し  
湯泉の香もともなへり草いきれ  
足元に海風ぎわたる小春かな  
木枯しや過去十年を一束に  
さながらに積もる別れや年の暮  
風邪の子と風邪癒えぬ妻俺も風邪

山茶花やゆふかたまけて風のなく  
夕闇のみちくるほとり枇杷の花

蝉時雨（平成五年）

可笑しともあはれとも夜の法師蝉  
石風呂にふる蝉しぐれ山の寺

葛の花（平成六年）

集る蠅なく風化せり終戦日  
住む場所のなき故里や葛の花

蟲鳴くや何ならんわが実存の

花冷（平成七年）

花冷の酒亭いろりにたどり着く

鮫鯨鍋（平成八年）

遠退きしもの追ひゆかん初明り  
独り居のごつた煮豆腐寒に入る  
生日の酒に寒九もどこへやら  
ふるさとは泪ふつつ鮫鯨鍋

サルビアの炎上にわが佇ちつくす  
桐一葉散る青ければ直に落つ  
どてら着て子に夢を説く漱石忌  
人に狎れ寄り来るあはれ都鳥  
青天へ梢ささげり枯公孫樹  
ゆくりなく来りしものに冬至の日  
冬至とぞいひ燦々と陽の光  
流行に疎くことしも冬至はや

兎罌かけて暮色に紛れけり  
居残りの机と俺の聖夜かな  
流れゆく時を身ぬちに去年今年  
去年今年あはきは四十半ばかな

涅槃道（平成九年）

一片の雲無き空の淑気かな  
菜の花のちららほららに涅槃道  
杉林ふかく日に照る秋子摘む

晩秋を当為うすれて家籠る

春宵（平成十年）

平成のはや二桁に去年今年  
胡麻和の芹も旨しよ真砂女さん  
せうちうにしづむ梅干春混沌  
木芽酔かも真砂女さん側にゐて  
春宵の酒店卯波に時止まれ  
茹芹を食ひ内心のわかれ酒

春疾風やみし銀座に夜の更けり  
とんからりん銀座稲荷の春の音  
鳥刺に酒春宵のわかれとす  
少年の残滓を胸に毛蟲焼く  
造花なる薔薇に酔へるも薄暑の夜  
小庵にこもりて芋の熟むを待つ  
大仰な論よそこのけ馬肥ゆる  
公務多忙にて高天を空しうす

まなしたに山原湖海秋あまねし  
無為といふ安らかにをり冬日向  
枯山の久保殿に風吹く頃か

両子谷（平成十一年）

性根なき陶土練りをり寒の内  
先生の御霊もともに二月尽  
鉄軌なほ北への夢に五月来る  
露草の眠りしんしん両子谷

つつましき癒しにゐたりとろる飯  
海の青嗚呼かぎりなし秋に入る  
底なしの組織に埋もれゐたり秋  
ふゆしぐれ里に下り来し累代墓  
曾祖母の思ひ出とほし雪のこゑ

春燈（平成十二年）

剥離せし眼鱗ともに屠蘇を乾す  
韓菜を寒九の宵の酒肴とす

低山に冬日さしをり嗚呼故郷  
寒鯨にほのぼのと過去結びそむ  
日をあみて冬枯に時走りけり  
光りゐる冬野のたひら母校跡  
胸中のふるき別離の枯野かな  
いづこよりいづこへ俺は虎杖笛  
冬大河およそ人語を寄せつけず  
澄むほどに室の百合とはなりにけり

一  
会  
か  
な  
春  
の  
み  
ぞ  
れ  
に  
句  
碑  
建  
ち  
て  
  
は  
る  
み  
ぞ  
れ  
古  
刹  
こ  
ん  
こ  
ん  
深  
眠  
り  
  
ほ  
た  
雪  
の  
な  
か  
の  
一  
会  
や  
落  
の  
寺  
  
は  
る  
の  
雪  
生  
れ  
し  
ば  
か  
り  
の  
句  
碑  
一  
基  
  
映  
像  
の  
自  
演  
自  
得  
や  
目  
刈  
時  
  
蟲  
い  
づ  
る  
日  
を  
待  
ち  
ゐ  
た  
り  
ア  
リ  
ラ  
ン  
忌  
  
春  
寒  
の  
あ  
め  
心  
底  
へ  
ふ  
り  
し  
づ  
む  
  
人  
間  
に  
倦  
む  
矛  
盾  
か  
な  
花  
菜  
雨

春寒し身ぬちにこごる澱をもち  
ペンもちて兆す孤独や春しぐれ  
余生ともはた未来とも麦を踏む  
落味噌や心底ふかく凧ぎがたく  
春燈やめぐりの過去を眠らしめ  
一生とは日めぐりに似て春炬燵  
早蕨のかうべを撫でしとき未来  
石楠花や身のうちそとの時の中

青ぬたを食む口中の未来かな  
針金の鳴る音寂し藺草割る  
立上がりにし冬濤に海隠れけり  
新緑に蔽はしめたる咎ひとつ  
えご散るや顧みしかば幾矛盾  
チゲ食ひて夢杳々と薄暑かな  
麦秋の身にしみて恨五百年  
真闇へとよろめくはぐれ蛭かな

暮鳴くや南山へ来よ早うとぞ  
キヨンジユへと傾ぐこころや花木槿  
地脈断つ海なかるべし芥子ひらく  
明けそめし海渺茫と秋に入る  
あぢさゐの房いろいろの祈りかな  
田楽のしこしこと否まつたりと  
犬眠る鼻先へ水打ちにけり  
故里は日毎遙けしことし蝉

背泳ぎのゆたのたゆたに雲仰ぐ  
抱かるることゆたかにて遠泳す  
炎帝を外に怒らせ午睡かな  
まつはれるもの鬱々と誘蛾灯  
もみくちやの反故そのままに麦茶のむ  
いつ迷ひ込みしか万華鏡の夏  
花火玉据ゑおかれしは冷ややかに  
裸木となり新世紀見据ゑけり

老づけば山里恋ほし蕎麦の花  
滝室の天高うして阿蘇の山  
根子岳の犬歯さながら秋に入る  
戯れに死後のことなどふぐと汁

春の雲（平成十三年）

冬すすき大気割れ日の乱れ射す  
捻りたる身をそのままに蝌蚪止る  
歯の欠けし隙間が淋し花菜汁

撤退といふ進展や露食へり  
故里を胸三寸に辛夷咲く  
父母譲りの涙もろさよ犬ふぐり  
アリラン忌恩師の教へわれの血に  
アリラン忌かな遠山に日脚伸ぶ  
群論の行列に似て蝌蚪の紐  
俺はもう諦めちやつた春の雲  
実るとも盗人をらぎ枇杷たわわ

長江は星こぼれゐん黄月忌  
風ありやなき路地ゆくや黄月忌  
凧こころを乗せて上りけり  
ふるさとの墓やさしかり年の暮

踏荆（平成十四年）

菜の花やのらりくらりと歩みたし  
賜りしもの無尽蔵アリラン忌  
春宵の時間ほぐれし如き闇

菜の花や来し方に似るその光  
行人の泪にほぐれ辛夷さく  
花菜摘んで川のべに過去呼び起す  
生れてはや五十年かな青き踏む  
ひとときの心に似たる焼野かな  
春宵の時を吸ひ尽くしたる闇  
芹摘んでゐて悔恨のこみあぐる  
悔恨を棄つ黄砂ふる空の下

荊また踏みゆく俺の四月かな  
おぼおぼと霞む道あり歩みいづ  
音のなく身にしむ春の愁ひかな  
目刈時暫く貝とならむかな  
もて余す心の揺れに春の風  
病み臥す父にも吹けや花菜風  
菜の花の光しづけし嗚呼故郷  
仏訪ふ蝶の飛びゆく方へかな

吹き払ふものなき故郷春はやち  
春愁や彼此のあひなる淵ふかく  
ほそぼそと道菜の花へ隠るひぬ  
芹食うてわが来し方を悼みけり  
消沈にゐしに春雷とどろけり  
貧しさは安らかさとも茅花つむ  
ぎしぎしやパンドラの箱もう開かず  
春昼の石となりたるいしぼとけ

一切を捨てし軽さに春の風  
クレソンの咲けり故郷に籍はなし  
われ呼ぶは彼の日の母か春無辺  
一片の落花いのちを惜しみけり  
山归来咲くやほとほと流浪人  
ふるさとに帰れば泪ねぎの花  
あしびきの満山春のみち独り  
心底に故郷よねむれ忘れ雪

ただにただにたふとき春野佛かな  
命とふ永久へのながれ花筏  
嗤ひごゑ背に残りゐて花吹雪  
花衣人のぬくみの抜けやらぬ  
一聯の風菜の花をかがやかす  
春ふかし響き親しき正信偈  
なみだはや涸れし眼に山笑ふ  
涅槃西風疑団を解しくれにけり

辛夷さくみち深閑と黄泉の夢  
くにさきの悉皆仏の山火燃ゆ  
音のなき賛嘆にして土筆群  
春無辺つみぶかうして影法師  
春宵の挫折とほくに灯のひとつ  
孤高なる俺さながらに春の雲  
たとふれば偏屈原の朝寝かな  
花は葉にまた純情をくりかへす

春 昼 の 山 気 よ ど め る 中 に か な  
五 十 年 な が し 短 し 蛸 蛸 の 紐  
駆 け て ゆ く 人 ら を 追 は ず 犬 ふ ぐ り  
竹 落 葉 は ら り は ら り と 時 刻 む  
我 執 い ま な し 春 昼 の 崖 つ ぶ ち  
な が か り し 自 問 の 果 て の 黄 砂 ふ る  
春 愁 の 深 淵 に 過 去 眠 ら し め  
黄 塵 と と も に 散 り た く 俺 は 居 り

春ふかし弘法堂のトタン屋根  
花菜漬食ひ血脈にうなづけり  
羊水のごとく卵の花腐しかな  
ありなしの希望さながら風光る  
つばくらめわが前面にひるがへる  
寂しさの例へば秋の金魚かな  
露けさややさしきものに草深野  
ひとしきり遠のく岐路や虫しぐれ

細りゆく父臥す里の曼珠沙華  
秋天にうち棄てんわが虚妄なぞ  
老人と俺との溝に秋日しむ  
おもひきり泣きたい夜の虫しぐれ  
しがらみを風に吹かして吾亦紅  
しんしんと耳にしみ入る秋思かな  
糸瓜忌の雲追ひかくる雲が見ゆ  
節食の躰溶けをり原爆忌

葛咲くや貧しかりしかこの山河  
恋ごころとふ埋火のごときもの  
剃刀のうすき刃に秋の風  
十月や往くさ来るさの俺の旅  
二等辺三角形も天高し  
秋愁や首を馘られし友が去る  
ひとつとのわが一本の道澄めり  
しづかなる当為に任す白露かな

神の顔さながらに父逝きにけり  
死にしかばかく安らかに父の顔

里の山（平成十五年）

淑気とぞ風をはらまし里の山  
青天を父へと昇るいかのぼり  
歳旦の父亡き居間のしづけさよ  
瞬きのまにオリオンの凍てりけり  
戦争の靴音がまた寒九の日

湾岸の地響のごと虎杖笛  
草青む俺の荊の人生に  
寒の夜の眼を閉ぢ闇の中に住む  
冬ふかし闇また深しわがこころ  
晴曇のまの夕光や日脚伸び  
鷺啼くや乙津川原に餌を欲ると  
思考をば伸びるはたての寒昂  
あかつきの空遠々に春隣

待春の時計ふたつの別次元  
きさらぎへ流る命といふ持続  
物の芽の息吹しんしん闇熟す  
世渡りに疎きわが身が青き踏む  
ふるさとにふくら雀と俺と逢ふ  
東風吹いて昭和の栄華また遠し  
春一番こころの澱を融かしけり  
魂は山河に帰して木々芽吹く

置き去りにせし夢のやう犬ふぐり  
友の住む遠つ国より黄砂ふる  
木蓮のはな紫に真砂女逝く  
春灯のたまゆら俺に点りけり  
媼逝く弥生のそらの蒼の涯  
落花はや昭和の御代を遙にす  
杳々と未来の香のす花菜汁  
鶴折つて媼に春を届けけり

チユーリップその単簡をいまま愛づ  
黄砂降る午後バグダード陥落す  
田園は荒れなんとせり春の夢  
菜の花の咲けり農事の人を見ず  
父いまは亡しこの山に蕨摘む  
目借時一から三へ時が飛ぶ  
董さく故山の過去に浸りけり  
その青は空の賜物犬ふぐり

春宵の雨一つまた訃報あり（山田氏ご逝去を悼む）

いちめんの花菜が踊る故郷かな  
物芽吹くおくの奥処の命とも  
断ち切れぬもの見せつけて蛸蚪の紐  
ひたぶるに嗚呼かく花の盛りかな  
いのちかな春風頬を撫でて去る  
晩春の降つて湧いたる良き話  
一票を投じ終へたる長閑かな

君いかに広東の春愛でをるか  
風光るよき過去を良き未来へと  
八重桜咲いて街路を親しうす  
目借時ごろ寝の犬も欠伸して  
若葉はやかすかに風と遊びをり  
春深し国成るまへの混沌も  
黄塵や長江を見し日も遙か  
黄砂降る旧知訪れ来るがに

天翔けしをみな的一生かな隴  
菜の花や父の碑見んと友来る  
この村に還る人待ち田芹摘む  
黄塵の彼此さかひなき思ひかな  
花の昼子らに押されて車椅子  
阿吽とふこの沈黙の雨水かな  
赤心の身に吹きわたれ春の風  
宮森に浅春の空明けゐたり

受 験 子 を お も ひ 思 は ず 米 を 研 ぐ  
春 愁 に あ り 寝 仏 の た な ご こ ろ  
一 汁 に 一 菜 と し て 瑳 芽 和 え  
恋 と い ふ 心 遙 け し 水 温 む  
昔 人 の 万 感 に し て 花 菜 か な  
草 青 む 乙 津 の 川 の 畔 か な  
南 風 吹 く や か た く 閉 ぢ ゐ し 心 底 も  
一 本 の 道 あ り 遠 し か ぎ ろ へ る

一歩づつ地を踏みゆかん犬ふぐり  
ご心配なく生きてますアリラン忌  
父の友おほかたは亡し草青む  
春日の影あたらしく廃校址  
クレソンや踏みしだき魚捕る子なく  
うらら日や磨崖の苔の青ふかみ  
たんぼぼに寄る罪深き影として  
父生家くぬぎ林となり芽吹く

過ぎし日はくぬぎ林の芽吹く中  
春雲を抜きん出るなく嗚呼故山  
たたなづく満山春の村しづか  
春風にしばし吹かるる故郷かな

平成十六年（菜花茫茫）

ベゴニヤの花くれなゐに平和あり  
菜花茫茫ビル林間の亭に着く  
鳩消えし水輪の中の水面かな

無何有さながらグラジオラスは咲きのぼり  
サルトリイバラその紅は決断す  
七変化わが一徹をすり抜けし  
石竹のつぼみ直ぐ立ち咲かんとす  
梅雨明けて一気に幼児ごころかな  
たえだえに降る秋雨の日なりけり  
亭の秋箱の中にも故郷あり  
猫じやらし稀にわが来るわが故郷

心中のイデアともこの曼珠沙華  
ほそぼそと野みち秋暑に乾きをり  
くにさきに目覚めし朝の花胡椒  
人もよし秋風も佳し両子谷  
秋の蝶風にはばたきながれけり  
味噌らつきやう脱香りんご飯秋ふかし  
母の伝言新米をやる帰り来よ  
日溜の空へタバコの輪を吹かし

両子嶺や遠木枯しの音のする  
秋光を身に浴しめて隠居せる  
つかみ得ぬ繫風捕影秋さむし  
隠れ住む亭したしけれ秋の風  
隠居して穴に入りたる蛇にかな  
童心をイデアと掲げ小六月  
柿食へばなほ蘇る熱きもの  
台風の最中にほのと過去が立つ

台風のよむ波乱の底に居り  
台風を時の流れと耐へゐたり  
台風の人あまた死に無惨やな  
菊一輪りんと我執を寄せつけず  
酒一合あれば足らへり冬長閑  
過去といふ幻とをり日溜りに  
山茶花のくれなゐに罪深くをり  
おのおのは各々生きて師走かな

介護とふ仕組を生んで山眠る  
冬麗にさながら隠者無為にゐる  
ゆふ風に踊るしぐさの冬薔薇  
相對し白山茶花に慚愧のみ  
焼芋の焦げし昭和の匂かな  
焚火して昭和が息を吹き返す  
焚火人貧しともなき背なが見ゆ  
燻りて焚火も軍事ありにけり

夜の沖（平成十七年）

漁明けの漁師の集ふ干潟石  
荒浜のまま寒ざむと暮れつるか  
にびいろに淀む河口や春の夕  
春寒の臥床やすけし灯の点り  
浅春の未明に覚めし初老かな  
二ン月の夢見んと又寝に就く  
男一匹泣けてきさうな名残雪

先生も父も黄泉路か阿里蘭忌  
生き延びてきて今年はや阿里蘭忌  
きさらぎの月中天に残り寒  
春寒の月は頭上に動かざり  
言葉とはやさしきものか四温の日  
あかときの門をいでゆく四温かな  
子を抱くがに湯たんぼと寝ねに就く  
啓蟄をヘルパーの卵として学ぶ

ネーブルを置く春宵の枕元  
歌詠は昭和と逝けり黄月忌  
過ぎゆきは日々帰るなし草の花  
血脈のみすぎ拙し秋の風  
行夏の風おのづから非をはらむ  
八月の草々は影育くめる  
水打つてほのかに通ふ風の中  
夏負し他人の如き身を疎む

夏負の鉛に似たりふくらはぎ  
秋立つや金魚は金魚ただ泳ぐ  
秋立ちて而して何をす秋ぞ  
老犬が庭に夢見る秋暑かな  
庭先に四肢を投げ出し犬残暑  
魂もやすらかならん村の盆  
アキレスが硬し弥生のタイルの床  
啓蟄に俺は偉いぞとふ顔に遇ふ

空しさを叩く春夜のキーボード  
介護といふ心の往来若葉風  
薫風や旧き論理はもう要らず  
祖母遠し父またとほし涅槃かな  
要領のわるきは血筋田搔牛  
糸瓜忌やだらーんと伸びてゐてはならぬ  
露しとど地下足袋穿いて出でゆくか  
月草の瑠璃にかすかに夢の跡

秋冷の床にひとりの愚人かな  
拙さを粹がる性にそぞろ寒  
糸瓜忌や時が結ふなる過去未来  
露草やとほき歴史のむしる旗  
億劫の糸に列なり虫しぐれ  
色鳥やかくも貧しき村があり  
あさがほの触つてみたい程の距離  
老犬の逝き色鳥のほしいまま

秋 天 の 高 雲 の 下 雲 は し る  
霜 降 の 夜 の 静 け さ は 神 泣 く や  
し ぐ れ 立 つ 海 へ と 旅 に 出 で し 夢  
木 枯 ら し の 吹 き 溜 ま る 夜 の 沖 が あ り  
宵 闇 を は ぐ く む ポ ス ト 冬 隣  
零 余 子 食 ふ 一 粒 づ つ が 悔 に 似 て  
ゆ き ず り の 年 の 水 路 に し て 涸 る る  
夢 を 追 ふ 様 さ な が ら に 雁 渡 る

移ろひを背に浅岸の鷺一羽  
銀漢の過去の光にしてあはれ  
ふるさとこのんもり小山装へり  
両子川水は末枯るる葦群へ  
レノン忌のバラードにある平和かな  
青春の語は気恥ずかしレノンの忌

初蝶（平成十八年）

塩田の土手が日に照る大旦  
遠空に飛機が雲引く淑気かな

白木蓮に街の孤独のしみゐたり  
二分咲きの花つつましく未来あり  
初蝶に砂漠の街は限りなし  
水温みたり凡愚なる両の手に  
菜の花や閉じゆく町の沈黙に  
羽化せんとする故郷かな黄沙降る  
花なづな市制近づく里の道  
南風吹いて町が歴史を閉じんとす

クレソンの青き香りに水暮るる  
菜の花に風なき一日暮れゐたり  
卵虫のあぎとへる音宵の口  
海の方へと一路あり炎天下

豆柿（平成二十年）

豆柿の面百倍の道夫来る  
冬麗の再会をまづ祝ひ酒  
冬菜なる羊蹄に巻き馬刺かな

願頂こそ道夫の所以著膨れて  
冬の日矢あみ一道に立つをのこ

脱藩者（平成二十一年）

人は逢ひ去りゆくものか合歡の花  
サルビアの花やさながら幕末期  
けがれなき物すがしがしかぼすの実  
くにさきの道の岐れやえごの花  
またたびの葉の白じろと旅恋ほし

ひもといて句集草笛紙魚うごく  
士業常何かに追はれダリア咲く  
心太戦後六十年の味のする  
ソーメンを喉に落としてより平和  
死に体の政府生き体の民暑し  
氷菓食ふ未知なるを人の心とふ  
飼犬の性盛りかな花ざくろ  
のうぜんの花の妖しき蔓の宴

蝉鳴いて昭和遺物の夏休み  
傷ついてみて冷酒をあおるのみ  
メビウスの道なほもわが夏の旅  
つばくらめ何喜びて空を切る  
旅人のおのれと認め夏野ゆく  
炎帝に這ひつくばつてかばちたれ  
傷心の男一人の熱帯夜  
さみだれの代官山が夢に顕つ

青春の語らひ遙か夜光虫  
睡蓮の花としばしの時の中  
パキ国のカレー食みをり扇風機  
華麗さをわが哀れまん夜の金魚  
一歩一歩分け入る土業青い山  
海みゆる丘百日紅の咲きそむる  
見えわたる海青うして夏の街  
握手してずつしりムハンマド君の夏

理科系のムスリム男児夏盛ん  
糸瓜忌も過ぎしか生死事大なる  
無香果の熟める香の立つ処過ぐ  
虫鳴かぬ天変不知の夜更かな  
次代へは何残すのか虫鳴かず  
熱く熱く生き延びて来た俺の秋  
潤すも腐すもしづか秋しぐれ  
立冬の時無為にしてゆたかなる

烏瓜むらの証しとして熟める  
刈田はや癒えて景色に融け合へり  
神留守といふ神棚へ幸祈る  
平和とは机の上の蜜柑である  
山茶花のくれなゐに恥深く住む  
通ふことなき自営業菊日和  
やせ我慢せる一匹や冬温し  
烏瓜赤きは恥の所為ならず

冠雪をせし鶴見岳修羅のうち  
つつましく蜜柑を食ふて世を倦まず  
しぐれ息みネオン瞬く街帰る  
小春凧ぐ海をかたはらに脱藩者  
民業に入りて十年落葉なか  
貧窮の夢覚めて霜降る夜かな  
搔痒も初老の証 小六 月  
ア口工咲く遙けきものに伊豆の旅

寂しさは眠る金魚のほとりかな  
家業をば築き上げたり年の暮  
来る年は一勝負せん笹子鳴く  
存在は善とか冬の蚊を潰す  
千両のくれなるにわが未来あり  
極月や世上に流れ流されて  
しぐれ息んで時の隙間に故郷あり  
風呂吹を食ひほらを吹く男かな

千両に留守居の解けし赤もあり  
一年をよくぞ越えをりおでん酒  
ストーブと燃ゆる心を通はしむ  
とろろ飯一生は土の香ほどとも  
リーマンの世界不況や粥すする  
困窮の世に国中の雪景色  
北吹いて童話の世へといざなはる  
北吹くや昼の明るき木々揺らし

未発の中（平成二十二年）

煙ごと浴みてすがしむどんど焼  
護符納め事務所きりりと緊りけり  
ま幸くと梅が枝を見る淑気かな  
七草の粥を平和の具体とす  
湯タンポに籠もる昭和の音がする  
しんしんと魂に冬沁むる夜  
冬潮の音とほどほに寝ねに就く

冬ざるる現宇宙の果てに住む  
じつとじつと我慢せよとや笹子鳴く  
山茶花を寂しき赤と見てゐたり  
冬芽みな未発の中として黙す  
貧を是と生き来し吾の冬貧し  
日溜まりに昭和が過去として遣る  
冬麗の河口の自由いつにても  
両子嶺のかぎろひやさし帰り来ぬ

老づきし眼にやさし山笑ふ  
青き踏む畑の下より川の音  
春茸摘む昭和につづく平成に  
春泥を車輪に巻き上げ櫓山へ  
ライトバン春茸を載せて山下り来  
山氣にて潤ふ畦の犬ふぐり  
くにさきのまさしく佛佛の座  
風吹けば桃の花飛ぶ一斉に

この村に生れてわが在り辛夷さく  
無住寺の弘法堂の春ふかし  
春の野の草に馴染みて石佛  
春深き山峡にして嗚呼故郷  
耕牛の幻に顯つ谷地田かな  
村出でて四十余年桃の花  
桃咲いて無何有の郷をなほも追ふ  
春はやち未明の闇が外に泣き

一本の道はるばると薊咲く  
しんしんと春の未明の時が消ゆ  
阿といふも畔とはならぬ田を起こす  
黄砂降る岬の果ての舳跡  
白貝を月のごとしと愛でにけり  
斧貝を砂の底より振り取る  
馬刀貝はしばし遊ばせ抜き取りぬ  
海牛のかくおほらかな時を生き

丸貝を這ひずりゆきし果てに取る  
超暑し事務進むなき事務室に  
汗拭いて鯨のごとし闇に浮く  
蛍舞ふ闇に無尽の生死あり  
炎天に軸さらけ出し車力かな  
山芋の青葉のハート愛でゐたり  
草田男忌右往左往に生き惑ひ  
簾して電波行き交ふなかに憩ふ

電 腦 の 世 に 氷 菓 売 恋 ひ め た り  
蚊 を 潰 す 超 く た び れ し 俺 に し て  
夏 山 の 尾 根 遙 か な り 恋 あ り ぬ  
真 砂 女 亡 く 志 満 亡 き 現 夏 深 し  
水 打 っ て 大 地 の 匂 庭 に 満 つ  
打 坐 し つ つ 一 つ の 夏 で あ り に け り  
乙 女 子 の 嫁 ぐ 日 近 し 夏 盛 ん  
墓 処 と い ふ 堰 堤 横 の 青 田 か な

古墓のほとりやすけく鯨を釣る  
風吹いてゐる故郷の夏野かな  
万緑や俺にはここが田園か  
鳳仙花ふるさとの道あり行かず  
公園の砂場にしきり蝉時雨  
のうぜん花しきりにこぼれ時が消ゆ  
梅雨に倦み湿漉漉の家の中  
青空がこんなに近い百日紅

人生は南泉猫児蛙鳴く  
つばくらめひるがへすもの俺に無く  
冬紅葉その角過ぎてわが事務所  
年晩れて未来をなほも思惟せる  
眼の裏のイデアへ歩む西瓜割

秋草（平成二十三年）

去年今年貫きしもの「今」となり  
人々に幸あれかしと坐す寒夜

行火抱き昭和はとほく偲ぶもの  
冬麗の街政略は目に見えず  
根深汁ほろり仁義の味にする  
日溜まりの雀がまとふ平和かな  
よじ登り食らいつき嗚呼団子虫  
水打てば猫額の畑に風が立つ  
一日灼けちつぽけな畑砂漠の香  
干からびし蝉のむくろも暮泥む

夕立来て農の縮図の畑息づく  
蝉一つ飛び来て落つる畑晩夏  
庭畑に古里しのぶ晩夏かな  
庭畑の主悠然と蜥蜴の子  
わしわしと熊蝉が鳴く時の中  
空蝉を抱きパセリが倒れ伏す  
わが顔に尿まりかけて蝉逃ぐる  
夕立後茄子の一個が昭和めく

いつしかに蝉ゐずなりし空木かな  
罪ありやなし一匹の蚊を潰す  
一束の時をかき混ぜ蝉去りし  
獅子唐の形いびつに秋暑し  
ささやかに日銭得し日の秋暑かな  
染みつきし少欲知足天高し  
子蜥蜴と新秋の畑分かちあふ  
秋草に似る一生とも移ろへる

秋 花  
ふ 甲  
か と  
し ふ  
心 安  
の け  
中 さ  
に の  
に あ  
老 り  
が 秋  
住 灯  
む 下

ど ん ど 焼 く 煙 ほ の か に 昭 和 の 香  
命 惜 し 冬 の 怒 涛 が ま な さ き に  
い き り 立 つ 津 軽 の 海 や 黒 の 冬  
ふ つ ふ と と 未 来 に 引 か る 寒 天 下  
雪 深 し 庭 畑 に 日 の 差 し 来 り  
あ か と き の 庭 お も む る に 雪 明 か り  
湯 湯 婆 を い だ け ば 遠 き 昭 和 か な  
し ん し ん と 風 花 の 舞 ぶ 時 空 あ り

出口なき負のスパイラル街凍てり  
消長の世代にありて寒に坐す  
黄水仙そのやさしさに身を預く  
シクラメン花首を地に垂れてゐて  
遠く病む友あり打坐す春浅く  
春宵の脳裡は広し意志が住む  
きさらぎや未来へ向かふカオスにも  
春日最も珈琲店の壁に照る

春空にぼつんと雲や何処へ行く  
千日の打坐終へしかな物芽季  
春風を乞ひのむ吾に雨降り継ぐ  
この国は借金地獄野火に似て  
留まるも行くも春泥ふかき径  
春はやて彼の日の真砂女おもひいづ  
エジプトに革命成りし二月かな  
僧のごと祈り暮らすに涅槃西風

葉桜のそよぎ幾万の死を悼む  
薊咲く野に帰り来ぬ父祖の墓  
緑濃き闇に懺悔の身を捧ぐ  
惜命の音低く降る春の雨  
初夏の海輝くを怖れをり  
春潮の数間ごとの遺体とぞ  
涙涸れ果てて万緑へ入らんとす  
大いなる擬眼揚羽の虫に見らる

雲の嶺恋を弔ふ遙けさに  
蟹のむくる上向いて水流れる  
収入があつた嬉しくて入道雲  
汗かけばまだ生きてゐる己かな  
夏来しによしのぼりらは何処行つた  
蟻の列西方浄土へと行くのか  
恋した俺の幻が青い山の尾根に  
住み着いて老づき花甲半ズボン

浴衣着てまっこと美人  
疲れきつて缶ビールの至福  
梅酒漬け一月もう飲んでみよか  
団子虫が庭のここかしこ仕事してゐる  
昭和遠しも多くを棄てた平成に  
二万余の人死んだのに政治劇  
ドットコム・ドットト某某暑し  
うっし世に何奉る法師蝉

スコップを置く秋庭の土の上  
秋深しベテルギウスの消滅も  
雨降れる遠田の赤は曼珠沙華  
湯げむりの下いづくにも露の秋  
宇宙基地飛ぶ天高し草取す  
水難の年終はれかしお中日  
我妹子をいざ見の遙か白木槿  
毒茸のかかる平和な庭にいづ

こほろぎを聴くこともなし貧化の世  
枕木の茶色に褪せし昭和かな  
崩れたる金権統治鉦叩  
神留守の家しんしんとアイパッド  
露草を庭に咲かせて花甲なる  
青く凧ぐ湾を越えゆく帰雁かな  
経済に人智の効かぬ秋思かな  
姫ソバの花可憐なりギリシャ危機

耳鳴りがマラカスに似る霜夜かな  
竹灯の炎に秋を惜しみけり  
秋ふかし灯火無尽の竹の宵  
竹宵や冬を迎ふる竹壺の火  
竹籠にこもる炎や秋の暮  
秋水の匂ふ城下の竹灯り  
万灯に秋ゆかしむる竹の宵  
道々に灯点す竹や秋の尽

とろろ芋搦つて一束の懺悔とす  
無花果のあと一寸の遠さかな  
柿の秋 T P P を知りもせず  
石躑咲いてもはや故郷は想ふもの  
かつがつの暮らしもよけれ根深汁  
見はるかす明暗しるく海しぐれ  
時雨息んで安けさはただ孤独なり  
マヤ暦終る一年前か青畝の忌

とろろ擂る故郷をなべてこの中に  
山の香にうづくまり掘る自然薯かな  
山芋掘る山の心に逆らはず  
山里の小武の里に秋惜しむ  
晩秋の羊蹄にしてよき酒肴  
芋鍋や霊界はかく身近なる  
麦飯食ふ冬蠅憎む男ゐて  
かぼす採る庭冬ざれの寢息あり

冬 侘  
の 助  
蚊 を  
を 活  
生 け  
か て  
し 現  
酒 金  
の に  
む 憂  
小 ひ  
武 を  
郷 る

田辺風信子年譜（本名 誓司・歩道同人・エッセー等筆名 井 せい）

昭和二十七（一九五二）年

一月十二日、大分県東国東郡西武蔵村大字両子（現安岐町大字両子）に生れる。

昭和四十三（一九六八）年 十六歳

この頃から、兄博充とともに作詞作曲を始める。

昭和四十五（一九七〇）年 十八歳

大分県立杵築高校を卒業する。

昭和五十（一九七五）年 二十三歳

長崎県立国際経済大学を卒業し、大分県職員となる。

昭和五十二 五十三（一九七七 一九七八）年 二十五 二十六歳

自己変革を期し少林寺拳法に入門、特に自力本願の「拳禅一如」及び「力愛不二」の思想に共鳴する。二段（少拳士位）を允可される。

昭和五十五（一九八〇）年 二十八歳

広岡典子と結婚し、別府市東荘園町五丁目一組に居を構える。

昭和五十六（一九八一）年 二十九歳

二月、長男誕生。

昭和五十七（一九八二）年 三十歳

俳句を始める。俳号は、実父孝臣が若いころ称した「風信子」を継ぐ。

昭和六十（一九八五）年 三十三歳

短歌誌「歩道」及び俳誌「沖」に入会。沖の中原道夫氏、能村研三氏を知る。

昭和六十一（一九八六）年 三十四歳

一月、長女誕生。

平成元（一九八九）年 三十七歳

三月、俳人中原道夫氏が来県し別府市のわが家に一泊、白魚の句を色紙に書く。

平成二（一九九〇）年 三十八歳

十一月、歩道短歌会の全国大会が別府市において開催され、全国から二〇六名の会員が参加する。当大会において、初めて佐藤志満主宰にまみえる。懇親会にて、加来進氏作詞・田辺誓司作曲による「歩道の歌」を合唱。同大会には、東京の大熊吉春氏も参加しわが家に一泊する。大熊氏とともに真木大堂をはじめ両子寺、三浦梅園旧宅を巡り、わが生家にも立ち寄る。

平成三（一九九一）年 三十九歳

「草笛（近代文芸社・日本俳人文庫二十二集）」刊行。短歌に専念するため、この年に俳誌「沖」を退会する。

平成四（一九九二）年 四十歳

二月、歩道発行所を訪ね、佐藤志満主宰に面会。主宰に位置を教えて貰い初めて蛇崩遊歩道を歩く。歩道十月号に歌論「佐太郎短歌と実在論」を発表する。



月号の歌壇の窓欄に「写生と手段」を執筆。十月、角川文庫の改訂版歳時記（冬）に昭和六十一年作の「大海鼠水吐き出して捌かれぬ」の句が収録される。

平成九（一九九七）年 四十五歳

短歌総合誌「短歌現代」の四月号に「佐太郎・魅力の一首」を執筆。短歌新聞六月号に「新人立論」を執筆。歩道の七月号から九月号の「作品（一）評」を執筆。八月黄月忌、第一歌集「菜花爛漫」を短歌新聞社から刊行。八月二十日、千葉市民ギャラリー・いなげにて開催の「芸術院会員・没後十年記念－佐藤佐太郎書画展」を訪れる。同月二十三日から二十六日まで石川県宇ノ気町における夏期哲学講座に連続四度目の参加を果たす。歩道十一月号に「形影」合評及び歌壇の窓欄「社会性再考（一）」を、十二月号の同欄に、「同（二）」を執筆する。

平成十（一九九八）年 四十六歳

三月、帰郷して別府市東荘園五丁目二組の自宅に住む。八月、歌に資するため陶芸を学ぶ。歩道の九月号の歌壇の窓欄に「永遠の未解決（一）」及び「自照の極致」を執筆する。歌人秋葉四郎氏が国民文化祭の短歌講師として来県（会場は、大山町）附近を案内する。その足でわが家に投宿、これを潮見聴風居（通称・聴風居）と命名す。歌人四元仰氏が聴風居へ来訪、獅子座流星群を見るため夜空をあおぐ。

平成十一（一九九九）年 四十七歳

歩道一月号に「永遠の未解決（二）」を執筆する。歩道七、八月号の歌壇の窓欄に、「時間的存在論（一）」及び「同（二）」を執筆する。八月黄月忌、随想の「風立つ村」をれ

んけい社より刊行。十一月、「存在価値固定詳論」を聴風舎より刊行、大分市内の書店・晃星堂において「風立つ村」と併せ市販に付す。

平成十二(二)年 四十八歳

短歌新聞新年号の「辰年いろはかるた」に「夜にふる雨のしづけくうつつなる音のつづきの未来をおもふ」の一首を発表。歩道二月号の歌壇の窓欄に「逆接法の効果」を執筆する。二月十八日、両子寺句碑「國東や枯れていづくも佛みち」の開眼式に出席のため来郷された俳人の一行、作者の能村登四郎氏、同氏のご息女萌子氏、ご子息の研三氏、及び同行の北川、長谷川両氏を大分空港に迎える。翌十九日、登四郎氏らと富貴寺を巡り、両子寺までご案内、そのまま式典に参加する。折しも春雪の降るなか劇的な体験となる。

平成十三年(二)年 四十九歳

歩道十月号から十二月号に、作品(東)評を執筆する。

平成十四年(二)年 五十歳

歩道二月号歌壇の窓欄に「新時代・インターネット社会展望」を、同二月号に同(二)を執筆する。五月号に形影合評(五十五)及び「歩道の軌跡」を執筆。六月末で大分県を退職し、七月から医療法人敬和会立大分豊寿苑に就職。十一月、社団法人倫理研究所大分支部において「短歌素材論における『老について』」と題して講話。十一月、父孝臣他界。歩道十二月号の形影合評に執筆。また、年末現在で、十六歳の頃から手がけてきた作詞・作曲のまとめとして計七十七曲のCD化を終了する。

平成十五年（二 三）年 五十一歳

歩道一月号及び二月号の歌壇の窓欄に、昨年末の社団法人倫理研究所大分支部における講話内容をもとに執筆。角川書店刊「短歌」二月号に「崩壊」八首を執筆。歩道八月号に「後期佐太郎短歌と茂吉」執筆。大山義雄氏の県生活環境部次長への昇任を祝し、「男道」を作曲し謹呈。角川書店刊「短歌」十月号に「乖離」八首を執筆。歩道十一月号の『開冬』合評を執筆。なお、第一目標であつた「私の福祉論」の原稿は、九月に完成したので近い将来刊行を目指す。

平成十六年（二 四）年 五十二歳

一月一日付けで「私の福祉論」を聴風舎から刊行。歩道一月号及び二月号の歌壇の窓欄に、「変動する社会の中で」を（一）と（二）に分けて執筆。角川書店刊「短歌」二月号に「相對」八首を執筆。歩道七月号から九月号まで作品（東）評を執筆。

平成十七年（二 五）年 五十三歳

歩道二月号及び三月号の歌壇の窓欄に、「外に見える歌壇」を（一）と（二）に分けて執筆。歩道七月号に形影合評を執筆。五月、ホームヘルパー二級課程修得。七月、セイさんが見た菜花苑のユニケア奮戦記、ヘルパー受講歌集及び同（二）、セイさんのヘルパー受講録（上巻）及び同（下巻）、並びに漢詩集の田聖司小品集及び同（二）の出版原稿を執筆・完成。

平成十八年（二 六）年 五十四歳

歩道一月号及び二月号の歌壇の窓欄に「受容のメカニズム」を、（一）と（二）に分

けて執筆し、併せて「形影合評」を執筆。また歩道九月号に、「開冬合評」を執筆。

平成十九年（二七）年 五十五歳

歩道一月号及び二月号の歌壇の窓欄に、「真・善・美の発現について」を（一）と（二）に分けて執筆。十一月号に「開冬合評」を執筆。

平成二十年（二八）年 五十六歳

歩道一月号及び二月号の歌壇の窓欄に、「短歌の未来を思考する」を（一）と（二）に分けて執筆。四月号と九月号に「開冬合評」を執筆。

平成二十一年（二九）年 五十七歳

歩道三月号に「開冬合評」及び歌壇の窓欄に、「国際化時代と短歌」を四月号と（一）と（二）に分けて執筆。

平成二十二年（三〇）年 五十八歳

歩道二月号及び七月号に「天眼合評」を執筆。五月号及び六月号の歌壇の窓欄に、「賛嘆の律動」を（一）と（二）に分けて執筆。年末に北海道函館等を巡り、「北の大地」としてまとむ。

平成二十三年（三一）年 五十九歳

五月還暦前の記念として友人の宮崎茂氏とともに中国に渡航する。上海、蘇州、杭州等を巡り、「回帰巡遊」にまとむ。歩道二月号及び八月号に「天眼合評」を執筆。五月号及び六月号の歌壇の窓欄に、「一人称独立詩型と単簡性」を（一）と（二）に分けて執筆。

## 書房アンテクス出版理念

近年、社会が経済至上の傾向を呈して久しく、この間人々は、生産より消費へ、不易より流行への歩を速めてまいりました。

そして時代の流れは、わが国に嘗々と培われてきた精神文化をも呑み込み、いまや、物的価値尺度が社会に遍く浸透しております。

一面、かすかながら新たな兆しもうかがわれます。明らかに不利な立場から正義を貫く法律家や、人道援助に生涯を掛ける活動家、また身体の不利益を反転し周囲に勇気を与える青年や、地域社会への奉仕に地道に取り組む個人の活動等であります。

こうしたなか私たちはここに、ヒューマニズムあふれる社会の構築を理想に弊社内に書房アンテクスを興し、地方にあって文芸、哲学、種々の芸術等に励む人々の活動を、良書の普及や刊行等を通して支援すべく歩み始めました。身近に営まれる文化活動を全国の同胞とともに共済し、新しい文化の形成へつなげようとの熱意からであります。この趣意が理解を得られ、新しい時代の潮流となるよう願ってやみません。

2011年6月

書房アンテクス代表

## 【出版概要】

たなべ ふうしんし

田辺 風信子

### 略年譜

- 1952年 大分県国東市安岐町両子に生まれる。
- 1975年 長崎県立国際経済大学卒業。
- 1982年 俳句を始める。
- 1985年 短歌を始める（歩道短歌会・同人・現代歌人協会会員）。
- 1991年 句集草笛を出版（近代文芸社）。
- 1997年 歌集菜花爛漫を出版（短歌新聞社）。

### 風信子全句集（定本） 心 底

---

---

発行 平成23年11月1日

著者 田辺風信子

発行者 書房アンテクス

発行所 書房アンテクス

〒192-0907八王子市長沼町178-42-502

（TEL代表 042-697-8777）

電磁書製作 書房アンテクス

---

---

P1000E（本体952円＋税）